

何のための自由意志か

自由意志論争の概念工学

渡辺浩太(早稲田大学)

本発表は、近年の分析哲学における自由意志論争において、自由意志概念に期待されているさまざまな役割について考察するものである。自由意志論争と言えば、以前は決定論と自由意志説との両立論対非両立論という対立軸を中心に議論が重ねられてきた。それぞれの立場の内、最も適切に私たちの自由意志概念を表現しているのはどれか、という分析の記述的な正しさが争われたのである。しかし、20世紀末頃からはこの対立軸を越えて、自由意志概念の単純性や自由意志論争の問題構成そのものに異議を唱えるといった、新たな立場を提示する哲学者が増えてきた。こうした哲学者たちに特徴的であるのは、自由意志に期待されている役割に基づいてこの概念の取り扱いの変更を提案している点である。ここでは代表的な論者として、ホンデリック、ペレブーム、ヴァーガスの三者を紹介する。

ホンデリックは決定論を受け入れた上で、私たちの生のあり方の変更を提案する。自由意志概念はそもそも、決定論によって脅かされる源泉性と、必ずしもそうではない自発性という二つの異なった要素から構成されている。しかし、従来の両立論と非両立論は自由意志概念を単一の観念と捉えており、責任に必要な種類の自由について、両立論は自発性だけを、非両立論は源泉性だけを論じている点でともに誤っている。また、私たちの生活において自由意志は道徳的責任だけでなく、生きる希望や個人的感情といったものとも関係している。こうした事情を踏まえるならば、決定論が真であったとしても実際に所有できるものだけを維持することで、過度な落胆を回避しつつ、適度な希望を抱いて生きていくべきであると、ホンデリックは主張するのである。

一方、ペレブームは、自由意志概念が複数の要素から構成されているとは考えない。むしろ、道徳的責任のために要求される自由な行為とは、行為者の制御を超えた要因によって規定されていないような、非両立論的に自由なものでなくてはならない、と主張する。ペレブームはさらに、リバタリアン(非両立論的自由意志論者)たちが主張するような、道徳的責任のために要求される行為者の能力ないし決定は、現代の物理学に則した科学的な世界観を考慮すればこの世界に存在しないと述べる。すなわち、前半の主張によって両立論を、後半の主張によってリバタリアニズムを否定することで、道徳的責任のために要求される自由意志は非両立論的なものだが、そのような自由は存在しない、というハードな非両立論を展開するのである。ハードな非両立論は刑罰の根拠となる応報主義を排除してしまうものの、むしろ効用に基づく加害者に対する人間的扱いを促進することができる。またペレブームによれば、人生の意味に関わるような達成感や充足感にもそれほど影響を与えることはない。このような主張から、この立場は楽観的な懐疑主義・消去主義と呼ばれる。

ヴァーガスもまた、私たちが素朴に有している自由意志概念は非両立論的なものであると考えている。非両立論的自由は私たちが具体的に考察を始める前の、前哲学的な直観に比較的適合しているが、これに対して両立論的自由は、非両立論的自由が障壁にぶつかるような事例において私たちが抱く直観に近い。つまり、非両立論的自由は直観に沿うが説明が困難であり、両立論的自由は説明に向いているが直観に沿っていない。ここからヴァーガスは、自由意志についての私たちの思考の輪郭を描

こうとする診断的説明を破棄し、自由意志ということでは何を考えるべきかを扱う改良的説明を導入する。自由意志は道徳的実践を正当化するという社会統制的な働きのために必要であるから、そのような役割を果たす概念へと改良されるべきである。このためには、道徳的実践の正当化という役割のために必要な行為者の特徴を同定し、その特徴がどのようにその役割を果たしているのかを、科学的な世界観と矛盾しないように説明することが求められることになる。この立場は修正主義と名付けられる。

興味深いことに、この三者は、自由意志概念に異なった診断を下しているだけでなく、異なった規範を抱き、それに基づいてこの概念の扱いに変更を加えようとしている。つまり、自由意志概念がどのような概念であるべきかという点においても対立しているのである。それゆえ、彼らの取り組みを公正に評価するためには、どのような役割のために自由意志概念を変更すべきか、という自由意志論争に対するメタ的な視点を導入する必要がある。

さて、意図的な概念の変更を巡っては、昨今「概念工学」という哲学的手法が盛んに議論されている。工学という言葉の他の用法との類比で考えるならば、「概念を工学する」とは、何らか特定の目的のために新しい概念をしつらえて、それを古い概念の代わりに、あるいは未だ概念化されていない現象や思想を表象する役割を担うものとして、社会へと実装するという試みである。それゆえこの試みは、概念を作る準備として状況を評価する段階、その評価に基づいて概念を実際に作り上げる段階、作り上げた概念を実装する段階という三つの段階から構成される。

概念工学は初めから既存の概念を記述的に分析することを目的としていないので、私たちが有している概念に欠陥があることから生じる哲学的問題に対処することができる。先に触れたように、長い哲学史の中で繰り返し論じられ、現代でも分析哲学の内で議論が続いている自由意志論争は、論じている概念そのものに問題がある事例の典型である可能性が高い。もしそうであるならば、自由意志論争は具体的な係争点に対処していくことによってではなく、意図的に自由意志概念を改訂することによって初めて解決が可能になるはずである。

概念工学を用いて自由意志論争を解決するためにも、やはり自由意志概念がどのような目的のために用いられるべき(でない)かを決定する必要がある。長い間、自由意志論争に携わる哲学者の多くは自由意志概念を道徳的責任の根拠として探求してきた。しかし、ホンデリックやペレブームの主張を見れば、自由意志概念の意義はそれに尽きるものではない。本発表は、こうした哲学者たちの見解に含まれる自由意志概念の役割に着目し、それぞれの役割の関係と重要性について議論する。

【参考文献】

- Burgess, Alexis, Herman Cappelen, and David Plunkett, *Conceptual Engineering and Conceptual Ethics*, Oxford University Press, 2020.
- Ted Honderich, *How Free Are You? The Determinism Problem*, Oxford University Press, 1993.
- Derk Pereboom, *Living without free will*, Cambridge University Press, 2001.
- Manuel Vargas, How to solve the problem of free will, in *The philosophy of free will : essential readings from the contemporary debates*, (ed.) Paul Russell and Oisín Deery, Oxford University Press, 2013.